

「政治的教養」の育成をめざした授業の開発

阿部 哲久

政治的教養の育成をめざした授業の開発と実践研究を行った。授業はジョシュア・グリーンの理論に基づいて構成した。「トロッコ問題」などの思考実験によって実感を持って考えさせること、活動に加えて人間の道徳的判断や道徳的価値観についての知識を学ぶことで自分自身の道徳的判断を客観的にとらえさせることを意図した。実践の結果を分析したところ、政治的教養の基盤として目標に設定した「一つの見解が絶対的に正しく、他のものは誤りであると断定することは困難である」という見方を育成する上で効果があることが示唆された。

I はじめに

2016年に18歳選挙権がスタートすることになり、「政治的教養」の育成が求められている。2015年10月には文部科学省から「高等学校等における政治的教養の教育と高等学校等の生徒による政治的活動等について（通知）」が出されている。この通知では教育基本法第14条に示された「政治的教養」について、我が国の政治や民主的手続きに関する知識を身につけさせるだけでなく「論理的思考力、現実社会の諸課題について多面的・多角的に考察し、公正に判断する力、現実社会の諸課題を見だし、協働的に追究し解決する力、公共的な事柄に自ら参画しようとする意欲や態度」としている。また、現実の政治的事象を扱いつつ政治的中立性を確保し、「現実の具体的な政治的事象については、種々の見解があり、一つの見解が絶対的に正しく、他のものは誤りであると断定することは困難である。加えて、一般に政治は意見や信念、利害の対立状況から発生するものである」ことをふまえた指導を行うよう求めている。

しかし、実際に国論を二分するような問題において民主的な議論が十分に行われているとは言い難い。民主的な議論とはどのようなものであるべきなのか、民主的な議論を実現するためにはどのような取り組みが必要で、どのような「政治的教養」を育成すべきなのか、考えなくてはならない時に来ているのではないだろうか。

II 問題の所在

2015年は、安保法制をはじめとして、テロや戦後補償の問題など、多くの人が自明視してきた様々な仕組みを問い直すような問題が衆目を集めた年であった。しかし、残念なことにそれらの問題について本質的な理解に至るような議論は行われなかったと言わざるを得ないのではないかと。特に安保法制の問題は、現在の日本の安全保障の成り立ちや問題点について考え議論する絶好の機会であったが、現実には両陣営が自分たちこそが民主的意見であると主張し合い、自分とは異なる意見を民主的で無い誤った意見であると決めつけた対立に終始し、問題そのものについて議論が深められることはついになかった。不十分な説明しか出来なかった政府はもちろんのこと、政府を批判する側の知識人、特に多元的に思考を操作することを専門としているはずの人文・社会科学系の研究者の中にも、感情に訴えようとするだけの言説や人格批判に終始する姿が見られたことは驚きであった。なぜこのような事態に陥ったのだろうか。

どうやらこのような状況は日本だけの現象では無い。ジョシュア・グリーンは『モラル・トライブズ』の中で、価値観の相違に基づく問題に対して議論が成立していない様子を例示しているが、そこで描写されている、米国での、対立する陣営が「合わせ鏡」のような批判の応酬をしている様子は、驚くほど昨今の日本での風景と似ている。そこにあるのは、そもそも相手の価値観が受容できず「相手も相手なりの善や正義に基づいて主張している」という理解をすることが出来ないために、相手が「善や正

義に基づいて行動する自分たちの邪魔をする悪意の存在」に見えてしまい、感情に基づく対立に終始し冷静な議論が成立しなくなるという状態である。

このような現状をふまえると、「政治的教養」の基盤として「一つの見解が絶対的に正しく、他のものは誤りであると断定することは困難である」という見方・考え方を育成する授業の開発が急務であると考ええる。

Ⅲ 授業の構想

(1) 価値観の対立をどうとらえるか

ジョシュア・グリーンの研究はこの点について重要な示唆を与えてくれるものである。

我が国ではマイケル・サンデルの番組で有名になった「トロッコ問題」であるが、世界の多くの研究者によって、この問題に対する人間の判断が、条件によってどう変わるのか、なぜ変わるのか、という研究が行われている。グリーンは、fMRIを装着してトロッコ問題を解いてもらうというユニークな実験など、哲学、心理学、神経科学を横断した研究を行い、「トロッコ問題」から、人間の道徳的判断には二種類あることを明らかにした。従来から哲学では道徳的な直観の存在と理性に基づく道徳的判断の存在が論じられていたが、彼はその関係を次のようなものであるという。

カメラには手軽にほどほどの写真が撮れるオートモードと、手間はかかるが上手くいけば思い通りのすばらしい写真が撮れるマニュアルモードがある。グリーンによれば、私たちの道徳的判断にも同じように二種類ある。とっさに判断できる効率的な道徳的判断（オートモード＝直観・感情にもとづく）と、時間がかかるが柔軟性のある功利主義のような道徳的判断（マニュアルモード＝理性的な思考にもとづく）の二つである。例えば「トロッコ問題」で犠牲者が少ない方を選択していた人が、一人の男を突き落とすことでトロッコを止めるかという問い（「ファットマン問題」）では多数の犠牲者が出ても突き落とさない選択をするのは、突き落とすという行為が感情に強く働きかけることによってオートモードの道徳がより強く働くようになるからであるという。

このような道徳的感情は民族や文化を問わず観察されるのだが、社会集団ごとに、感情に意味づけを行う道徳的価値が異なって共有されているために、他の社会集団の道徳的価値が理解できなくなっている。その結果として同じような義憤や怒りを相互にぶつけ合うという、今日の日本や世界でみられるよ

うな対立の構図につながっているというのがグリーン
の指摘である。グリーンは、共有できる道徳に反したかどうか（盗んだ、嘘をついた等）と言う問題は通常論争にならないのであって、そもそも「論争」になるということは、異なる道徳的価値観の対立が生じているということを示しており、そんな時は自分の道徳的直観（オートモード）を信じるのを一旦停止して、マニュアルモードに切り替えるべきであるという。なぜなら、トロッコ問題を提示されたとき、文化や民族に関わらず多くの人が功利主義の判断をするということは、人間は誰でも、副次的な影響について考え、自他の違いを超えて平等を重視し、幸福を公平に最大化しようとする道徳的判断（マニュアルモード）を「わかる」ことができることを示しているからである。感情を刺激されるとオートモードが起動することも共通しているとはいえ、そこには道徳的価値観の壁を越えて共により良い解決を目指すことが出来ることが示されているのである。

(2) 授業の構想

政治的教養を育成するための授業・活動は様々な領域で継続的な指導を行うことが重要であるが、今年度は、高校1学年でのESDの特設授業として授業を行った。授業はグリーンの研究から次の3点をポイントとして抽出して構成した。

- ①道徳は感情であり理性である
- ②論争（対立）がおこるのは人が道徳的だからである
- ③人間は感情を棚上げした道徳的判断をすることもできる

前述したように道徳的判断に直観と理性的思考の両面があることは従来から指摘されていたが、この考え方は多くの人にとって自明ではない。道徳は学ぶもの、感情を制御するために教えられて身につくもの、といった考え方も広く定着している。授業では思考実験や活動も取り入れながら生徒の「あたりまえ」を覆していき、グリーンの研究を紹介するとともに、シリア難民の事例など現代の問題に置き換えて考えさせることによって、人間の道徳的判断や価値観について多面的・多角的に考えさせた。

なお、多様な価値観を受容できるようにするというねらいのためには、討論を行うことで多様な考えに触れさせれば良いのではないかと考えがちであるが、社会心理学の研究からは、討論を行うとむしろ主張や信念は強化されることが指摘されている。グリーンはフィリップ・ファーンバックの実験を紹介して、多様な意見を受容するためには、自分の主張の理由を挙げ合うのはむしろ逆効果であることや、

自分の主張を説明し合うことによって自分の不完全さを自覚する場面をつくる方が有効であることを紹介している。今回は、このような知見も生徒に示し、価値観の対立について客観的にとらえさせることを意図した授業とした。

授業では、思考実験などの活動を取り入れたり、現代社会の諸問題を題材として用いることで、哲学的な内容が言葉だけのものにならないようにすることを意識して構成した。

(3) 授業の構成

導入	囚人のジレンマの活動を通して人間の判断は合理的ではないことに気づかせる。
展開1	トロッコ問題について実際に考えることを通じて自分自身の中に異なる道徳的判断基準があることに気づかせる。

展開2	考察を深める中で道徳的判断が感情に基づくものでもあることに気づかせ、現代の社会の問題に置き換えて考えさせる。
終結	異なる道徳的価値観を越えて問題解決を目指す方法について考えさせる。

IV 学習指導案

日時 11月18日(水) 第7限

場所 講堂

学年 高校1学年生徒(男子110名, 女子95名)

題目 トロッコ問題から考える持続可能な世界

目標 政治的な主張について、一つの見解が絶対的に正しく、他のものは誤りであると断定することは困難であるという見方を持てるようにする。

指導過程

教師の活動・発問	・生徒の活動 ○習得させたい知識等 ◇留意点
<p>○じゃんけんゲームをしよう。 ルールは次の通り。 ・自分がゲーで相手もゲーなら 自分に2点, 相手に2点 ・自分がゲーで相手がパーなら 自分に0点, 相手に3点 ・自分がパーで相手もゲーなら 自分に3点, 相手に0点 ・自分がパーで相手もパーなら 自分に1点, 相手に1点 が入る。 ○二人組を作って10回戦をしてください。 ○結果はどうでしたか? (結果を確認する)</p> <p>○このゲームのポイント, 難しいところはどこだろう。 ○このような各人の行動が相互の利害に影響する状況での最適な選択について考える領域はゲーム理論と呼ばれるが, 今回の事例は「囚人のジレンマ」と呼ばれるものだ。 ○同様のモデルが目玉されたのはなぜだろうか。 ○ジョン・ナッシュは「囚人のジレンマ」についてどんな指摘をしたのだろうか。</p> <p>○非協力で均衡するのが合理的だとしたら, 国際問題での協力はできないということになるのか。 ○実際の人間の行動について研究している社会心理学の研究ではどんな知見があるのだろうか。</p>	<p>◇活動によって楽しみながら人間の道徳的判断に対する関心を高める。</p> <p>○自分の点が多くなるように指示する。ただし, 両方が勝ちに行って二人ともパーを出すより, 協力してゲーを出す方が点は多くなることを指摘してジレンマを意識させる。 ○ゲーとパーしか出せないじゃんけんをする。 ○協力したグループや, 協力しなかったグループなど様々なグループがあったことを確認する。 ○協力をしたいと思っても, 相手がどう出るか分からないと協力できないこと。 ◇ゲーム理論が数学的に精緻化され分野として発展していることに触れる。</p> <p>○冷戦下での核開発競争, 環境問題, 領土問題など, 現実の社会における問題が「囚人のジレンマ」の状態にあると考えられた。 ○ナッシュはこのモデルにおいては ・相手が協力の場合, 自分が協力なら2点, 非協力なら3点 ・相手が非協力の場合, 自分が協力なら0点, 非協力なら1点 となり, 相手の出方に関係なく自分は非協力を選択していれば, より高い点を得られること, これは相手にとっても同じことが言えるため, 合理的な選択の結果(ナッシュ均衡)は両者非協力になると指摘した。 ・できる できない</p> <p>○山岸俊男らによると, 相手がわからない一回限りのゲームでは半数をこえる人が協力しており, 文化の異なる多くの国で同様の結果が出ている。</p>

教師の活動・発問	・生徒の活動 ○習得させたい知識等 ◇留意点
<p>○人は自己利益のためには不合理であっても、意外と協調して行動しているのではないか。</p> <p>○では、安全保障などで協力できないのはなぜか。</p> <p>○トロッコ問題を知っているか。</p> <p>○TV番組でも話題になった次のような話である。 ・「自分はコントロールを失ったトロッコの運転手である。このままでは前方の作業員5人をひき殺してしまうのは明らかだ。ポイントを切り替えて待避線に進路を変えることができるが、そちらにも1人の作業員がいる。どうすべきだろうか？」</p> <p>○質問はあるか。</p> <p>○これらの条件を排除するのだろうか？</p> <p>○では意思表示をしよう。どちらを選びますか。</p> <p>○1人を犠牲にする判断の基準はどのようなものだろうか。</p> <p>○ほとんどの人は功利主義的判断をしたようだが、では次の例ではどうだろう。 ・「トロッコのスイッチを操作して方向を変えるのではなく、線路の上の方に立っている大きな男を線路の上に落としてトロッコにぶつけて止める（男性は死亡する）ことは許されるか？」</p> <p>○では、この例ではどうだろうか。 ・「公平なくじで健康な人をランダムに一人選び、殺す。その人の臓器を全て取り出し、臓器移植が必要な人々に配る。臓器くじによって、くじに当たった一人は死ぬが、その代わりに臓器移植を必要としていた複数人が助かる。このような制度は許されるか？」</p> <p>○なぜ意見が変わったのだろうか。</p> <p>○教会はどう説明してきたか。</p> <p>○この説明で十分か。</p>	<p>・相手が非協力だった場合のリスクが大きい。 等</p> <p>◇ここまでの内容を整理し、視点を変えて考えてみることを示す。</p> <p>・見たことがある 読んだことがある 知らない 等</p> <p>◇サンデルの著書なども紹介する。</p> <p>◇実際の考案者はフィリパ・フットであること、多くの哲学者に影響を与え「トロッコ問題」と呼ばれていることにもふれる。</p> <p>◇暴走するトロッコのイメージがわかりやすいように映画（ラピュタ等）の画面などを紹介する。</p> <p>◇よくでる質問は用意しておきフロアから出なければ授業者から示す。</p> <p>・警笛を鳴らしたら？</p> <p>・大怪我ですむかも？</p> <p>・犠牲となる一人が家族だったら？</p> <p>・犠牲となる一人が偉人だったら？</p> <p>○これらの条件を考えないことによって、普段無意識のうちに行っている判断（自分にとっての『正しい』判断）が、実はどういう基準に基づいているのか、妥当性が本当にあるのか、を自覚的に考えるきっかけにするのが思考実験のねらいである。</p> <p>◇命を仮定で色々あつかうので不快感があるかも知れないが、それは自然であること。極限状況を考えることで見えてくる部分もあることを伝える。</p> <p>・5人を犠牲にする 1人を犠牲にする</p> <p>◇通常多くの生徒は1人を犠牲にする選択をするが、それぞれの生徒から理由を述べさせるようにし後の展開につなげる。</p> <p>○どの人も同じ価値があるとすれば、犠牲になる人は少ない方が良いと言う考え方であり、その前提には「誰も1人以上には数えない」という平等性を重視した考え方がある。</p> <p>○このような考え方がベンサムによる功利主義であり、公正さについてのひとつの考え方であるといえる。</p> <p>○結果としてより多くの人が幸福になることを重視しており、結果主義、幸福主義ともよばれる。</p> <p>◇トロッコ問題に刺激を受けたジュディス・ジャーヴィス・トムソンの考案で「ファットマン問題」と呼ばれていることに触れるとともに、フット自身による同様の応用問題も紹介する。</p> <p>・5人を犠牲にする 1人を犠牲にする</p> <p>◇通常1人を犠牲にする選択をする生徒は大きく減少し逆転するが、それぞれの生徒から理由を述べさせるようにし後の展開につなげる。</p> <p>◇ジョン・ハリスの考案による「臓器くじ」とよばれる問題であることにふれる。</p> <p>・5人を犠牲にする 1人を犠牲にする</p> <p>◇通常多くの生徒は5人を犠牲にする選択をする。</p> <p>◇自由に意見を発表させ議論させるようにする。</p> <p>◇功利主義の選択にはある種の公正さが含まれていたはずであることを再確認し、それを受け入れられないのはなぜか考えさせるようにする。</p> <p>○カトリック教会は意図された危害と、予見されるものの意図されているわけでは無い副次的な危害を区別するという「ダブルエフェクト原理」という概念を用いて説明している。</p> <p>○倫理的な直観に説明を与え結果主義の暴走に歯止めを掛けてきたという意義はあるが、中絶の問題で用いられる場合、意図されたものかどうかの境界線が恣意的であることが明らかとなるなど、十分な説明にはなっていない。</p>

教師の活動・発問	・生徒の活動 ○習得させたい知識等 ◇留意点
<p>○サンデルの著書ではどんな説明をしているだろうか。</p> <p>○この説明で十分か。</p> <p>○そもそも道徳は自由な意思の選択なのか。</p> <p>○道徳は理性か。</p> <p>○領域を越えた「トロッコ問題」への関心から参考になる知見は得られないか。</p> <p>○トロッコ問題を考えるとき我々はどんな手続きをとったか。</p> <p>○道徳は理性なのか感情なのか。 人間の道徳的判断にはどんな特徴があるのか。</p> <p>○なぜファットマン問題の判断が変わったのか。</p> <p>○オートモードの道徳的判断とは何か。</p> <p>○オートモードが可視化された事例はあるだろうか。 ・海岸に打ち上げられたシリア難民の少年の写真と、その反響を示した新聞記事などを提示する。</p> <p>○オートモードの持つ可能性とはどんなものか。</p> <p>○私たちは功利主義のようなマニュアルモードの道徳的判断より、オートモードを大切にすべきなのか。</p> <p>○新しい問題として「ループ問題」を考えてみよう、この場合はどうだろうか。 ・トロッコ問題の分岐した線路の先が合流しているとしたらどうだろう。どちらのルートも5人のいる地点につながっているが、片方には1人の作業員がいる。作業員がいる方を選択すれば犠牲者は1人、</p>	<p>○サンデルはここで、カントを紹介している。カントは「人格は常に目的としてのみ扱われなければならない。」という。この考え方からは太った男をつきおとすのは人を手段として扱っているから誤りなのだと説明できる。</p> <p>◇カントの哲学は、義務論ともよばれ、人間の尊厳を重んじ、最高の道徳原理を追求したことなどにも触れる。</p> <p>◇厳格な自由の概念としての自律の考え方、動機こそが重要（善行は喜びのためであれば道徳的価値が無い）といった考え方なども紹介する。</p> <p>○カントの考えは規範としてはともかく厳格すぎて実際にそのように行動できる人は少ないのではないかと、また絶対的な道徳規範が存在するという前提は受け入れ可能か、といった様々な疑問が残る。</p> <p>○我々は、利己主義は感情に基づき、それを抑える道徳は理性であると考えてしまいがちである。</p> <p>◇文科省の道徳教育のHPでも「道徳を（学び）身につける」という表現がされていることを示し広く定着している考え方であることを押さえる。</p> <p>○生物学者のマーク・ハウザーによれば、トロッコ問題、ファットマン問題への反応は、教育の程度、宗教的背景、民族などの文化による影響がほとんど無かったことから、人の道徳的判断は理性と理論よりも、直観と感情の影響を受けているのではないかと指摘している。</p> <p>○ジョシュア・グリーンはfMRIを装着してトロッコ問題を解くという実験を通して、「トロッコ問題」と比べて「ファットマン問題」を考えている人々の脳では、前頭葉の感情に関わる部分（前頭前野）が強く活動していることを明らかにした。この実験などからグリーンは、自分の行動が原因となって人間が直接的に傷つくことに対しては強い道徳的「感情」が湧くこと、すなわち倫理や道徳に関わる判断においては、合理的で理性的な計算（5人对1人）だけではなく、「感情」が大きな役割を果たしていることを指摘している。</p> <p>○様々な条件を排除した。この手続きを行うことで、道徳的な感情・直観を一時停止させ、理性で考えようとしたのではないかと。</p> <p>○カメラには手軽にほどほどの写真が撮れるオートモードと、手間はかかるが上手いけば思い通りのすばらしい写真が撮れるマニュアルモードがある。</p> <p>グリーンによれば、私たちの道徳的判断にも同じように二種類ある。とっさに判断できる効率的な道徳的判断（オートモード＝直観・感情にもとづく）と、時間はかかるが柔軟性のある功利主義のような道徳的判断（マニュアルモード＝理性的な思考にもとづく）の二つである。</p> <p>○一旦止めていたオートモードの判断が再び起動したのではないかと。</p> <p>○人間は「私」より「私たち」を優先させようとする道徳的感情を持つように進化し、感情・直観として埋め込まれている。その中身は、思いやり、互惠性、忠誠、義憤、友情、共感などであり後天的に学習した道徳や価値観に関係なく観察される。</p> <p>○人間は個人間の協力を促すように進化してきたのではないかと。</p> <p>○リアルな現実を表した写真が、ヨーロッパの人びとのオートモードの道徳的感情に働きかけ、難民受け入れの世論がわき上がった。</p> <p>○「私たち」のこととして感じることで世界の問題に対する大きな力になることがある。</p> <p>○トマス・ホッゲは、『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか』の中で、支援は目の前の人を救うのと同じ道徳的義務のほずでありそのことに気づくべきであると指摘している。</p> <p>◇功利主義が数の暴力になる可能性や、それを止める上でオートモードに働きかけることが有効である可能性を確認する。</p>

教師の活動・発問	・生徒の活動 ○習得させたい知識等 ◇留意点
<p>いない方を選択すれば犠牲者は5人となる。 ○では意思表示をしよう。どちらを選びますか。</p> <p>○この問題からわかるオートモードの判断の特徴は何か。</p> <p>○オートモードの道徳的判断とは何か。</p> <p>○現代の社会で起こっている大きな問題の共通点は何か。 ・テロ、宗教対立、環境問題 等を例示する。</p> <p>○囚人のジレンマの実験では協力できる人が多いのに世界では協力できない問題があるのはなぜか。 ○なぜ現代社会は論争が山積みなのか。 なぜ問題解決が難しいのか。 ○このような問題では議論はどんな展開をするか。 ・同じ報道に対して異なる立場の人が「偏った報道だ」と批判している例などを示す。 ○価値観の対立を伴う問題の解決は困難なのか。</p> <p>○マニュアルモードを起動すべきなのはどんなときか。</p> <p>○自分自身の道徳的直観を一時停止し価値観の対立を越えるためには何が必要か。</p>	<p>・5人を犠牲にする 1人を犠牲にする ◇通常多くの生徒は1人を犠牲にする選択をする。 ◇この問題では1人は手段として殺されることになるため「意味」から言えば「ファットマン問題」と同じことのはずであり、道徳的感情が刺激されて良いはずなのに、功利主義的判断になったことを押さえる。</p> <p>○オートモードの道徳的判断は「突き落とすこと」のような行為の感覚的・運動的特性に敏感であり、不作為には反応しない。が、その基準は曖昧である。グリーンは災害被災者を助けるかどうかの判断に最も大きな影響を与える要因は「物理的な距離」だったことを指摘している。 ◇オートモードは直観・感情であるがゆえに曖昧な部分があることを押さえる。 ○身近にいる仲間の危機に反応することから、仲間同士で助け合うために起動することから、仲間と協力して他の集団と競い合うために進化した可能性が指摘されている。 ◇「私たち」のためのメカニズムであり、遠く離れた「彼ら」を助けようとはしないという限界があることに気づかせる。</p> <p>○現代の世界を覆っているのは異なる価値観の間の対立である。 ○私たちの社会は、共通する道徳的直観を核にしながらも、社会集団ごとにそれぞれ異なるローカルな道徳的価値観の体系が構築されている。その結果集団ごとのずれが生じ、道徳的価値観の体系は、よそ者には理解不能なものになっており、「私たち」と「彼ら」の間で対立が生じている。 ○道徳的直観は「私たち」と「私」の問題は解決する（協力できる）が、「私たち」と「彼ら」の問題には対応できない（協力できない）。 ○それは人間が道徳的だからである。（道徳を大切にしよう時には自己を犠牲にするが、自分たちの道徳しか見えず、相手は非道徳的に見えてしまう）</p> <p>◇現代の世界で共通して見られる現象であることを押さえる。</p> <p>○オートモードの判断に頼るのであれば困難であるが、幸い我々はマニュアルモードの判断もできる。 ◇トロッコ問題とファットマン問題に対する反応は、文化や民族に関わらないというハウザーの報告を想起させる。 ○文化や民族に関わらずトロッコ問題で功利主義的判断をするということは、人間は誰でも、副次的な影響について考え、自他の違いを超えて平等を重視し、幸福を公平に最大化しようとする道徳的判断を「わかる」ことができることを示している。（感情を刺激されるとオートモードが起動することも共通しているが。） ◇「私たち」と「彼ら」のどちらにも「理解できる」共存の出発点はあることを示していること、マニュアルモードの判断をすることで、異なる価値観の対立を越えた解決を目指すことができる可能性に気づかせる。</p> <p>○共有できる道徳に反したかどうかと言う問題は通常論争にならない。「論争」になるということは、異なる道徳的価値観の対立だということである。言い換えるなら「私たち」対「彼ら」の問題だということである。そんな時は直観を信じるのを一旦停止して、マニュアルモードに切り替えるべきであるとグリーンは指摘している。 ◇功利主義を批判し、ロールズの格差原理に基づくことを主張しているとき、「配慮すべき少数者」が恣意的に選択されていないか（自分のオートモードのみに従って都合良く誤った形でロールズを引用していないか）自問することの必要性について考えさせる。 ◇自分の主張の根拠を述べ合う議論の方法は実際には自分の意見への固着を強めるだけであるという心理学の実験の報告は多い。一方、フィリップ・ファーンバックらの実験では、政策の主張の議論で「自分の主張について説明をもらおう」ことによって自分の理解度に対する評価が下がり、穏健な考え方に変わることが確認されている。「なぜ？」と聞くのではなく「どうなっているの？」と聞き合うことで「無知の知」への気づきから自己理解が客観的になると考えられている。</p>

教師の活動・発問	・生徒の活動 ○習得させたい知識等 ◇留意点
○現代社会の問題に対してどのように取り組むべきだろうか。	○そこに「公正」「正義」があるのに、相手はそれを認めようとしな。そう感じられるときこそ自分自身の道徳的直観を一時停止し、(功利主義のように)お互いの存在を等しく扱うことから始めることが必要なのではないか。 ◇自分のこととして、自分なりの取り組み方について考えるようにさせる。

V 結果と考察

授業はロングホームルームの時間に高校1学年の生徒全員を対象として本校講堂で実施した。資料提示等はすべてスライドをスクリーンに映写して行った。授業後は教室に戻り、有意義だったか、おもしろいと感じたか等を5段階で問うアンケートと、自由記述による感想の記入を求めた。アンケートの結果を集計したのが次の表である。

評価	5	4	3	2	1
有意義だった	114	59	19	5	1
おもしろかった	135	43	16	4	0

(単位：人，回答数198)

全体に高い関心を持ち、授業の意義を感じていたと言って良いであろう。「哲学は普段の生活や今抱えている問題にこんなにも関わるものかと驚いた。」「今まで何となく感じていたりもやもやしたりしていたことが言葉に表されていたのを見ることができてスッキリした。」といった記述もあり、価値観の問題等について考えることの意義を確認できた生徒が多かったことも見て取れる。評価が低かった生徒もいるが自由記述を見ると、本などを読んですでに知っていた、難解だった、現実的に思えなかった、授業の進行が早すぎたといった理由であった。また、思考実験で命を扱うことの意図については授業のはじめに言及しておいたが「命を扱う問題を考えるのは難しかった。」「トロツクの問題は分かりやすいけど残酷だと思った。」等の記述をしている生徒もいた。一層の慎重な扱い方が必要であろう。

次に自由記述の内容を分析し、グリーンの理論から抽出した三点と授業の目標に関連するものを抽出し抜粋したものが次の表である。

①道徳は感情であり理性である
「感情によって道徳が動いているというのは新しい発見だった。」「話題によって結果が全く異なることに驚いた。」「条件によって選ぶ方が変わることを実感した。」「普段意識せずに判断していることが実は二つのモードを使い分けているのが興味深かった。」「自分は数で判断していたと思っていたけど実はそう

で無いことが分かって自分の新たな感情を知れたのでおもしろかった。」等

②論争(対立)がおこるのは人が道徳的だからである

「自分と違う判断をした人がどういう理由で選んだのか気になった。」「なぜ相手がそのような考えを持っているのかを考えることが大切だと思った。」「議論がまとまらない理由に自分との距離や関係性が関連しているというのに興味を持った。」等

③人間は感情を棚上げした道徳的判断をすることもできる

「自分も一旦頭をリセットしてから考え直感にたよりすぎないようにしたいと思う。」「私たちが正しいと思っているものを一歩引いて考えることが必要だと分かった。」等

【目標】一つの見解が絶対的に正しく、他のものは誤りであると断定することは困難であるという見方を持てるようにする。

「どっちが絶対正しいとかないので余計悩みました。」「自分が物事を判断するときかに直観的であったかを考えさせられた。」「何が正しいのか正しくないのか、それともどちらも正しいのか謎は深まるばかりだった。」「いくら考えても答えは出ないのかなと思った。」等

自由記述からは、思考実験などの活動が実感を持って考えることに有効であったこと、人間の道徳的判断や道徳的価値観をメタな視点から捉えて考えることができたこと、またそれらを通じて目標とする「見方」に接近できたことが読み取れる。さらに「社会における様々な問題をもう一度見直してみようと思った。」等、実際に社会と関わっていくために生かそうとする記述も見られた。政治的教養の基盤となる見方を育成する上で一定の効果があったと言えよう。加えて、少なくない生徒が、授業を聞いて考えたことや、それまでに考えてきていた哲学的な思索の内容について詳しく綴っていたことも印象的であった。

今後の課題としては、今回の授業は、あくまでも人間の道徳的判断そのものについての知識を獲得することで、社会における価値観の対立について考え

させることを意図したものであったため、グリーン
の示す道徳的判断をふまえながら、現実の政治的問
題について分析し考えさせることで、生きてはた
らく政治的教養につながるような授業の開発をして
いく必要があると考えている。また、価値観の対立
を越えることができたとして、次に、協力して問
題解決を目指すときに必要となることは、専門家
とのコミュニケーションである。専門性へのリス
ペクトを育成し、専門家と適切なコミュニケーション
を形成できるようになるためのカリキュラム開
発にも取り組んでいきたい。

参考・引用文献

阿部修士「常識的道徳の悲劇を乗り越えるために—
『深遠な実用主義』に向けて」, SYNODOS
JOURNAL, 2015年, [http://synodos.jp/society/
15282](http://synodos.jp/society/15282), (閲覧日: 2016年1月13日)

ジョシュア・グリーン, 『モラル・トライブズ? 共
存の道徳哲学へ?』, 岩波書店, 2015年

小山エミ「『消極的義務』の倫理? 「トロッコ問題」
の哲学者フィリパ・フットとその影響」, SYNODOS
JOURNAL, 2010年, [http://synodos.jp/society/
1589](http://synodos.jp/society/1589) (閲覧日: 2016年1月13日)

小山エミ「『トロッコ問題』記事への追記—思考
実験の功罪, ダブルエフェクト原理, フィリパ・
フットの真意」, SYNODOS JOURNAL, 2010年,
<http://synodos.jp/society/2230> (閲覧日: 2016年1
月13日)

マイケル・サンデル, 『これからの「正義」の話を
しよう—いまを生き延びるための哲学』, 早川書
房, 2010年

文部科学省「高等学校等における政治的教養の教育
と高等学校等の生徒による政治的活動等について
(通知)」, 2015年10月29日

トマス・ホッゲ, 『なぜ遠くの貧しい人への義務が
あるのか—世界的貧困と人権』, 生活書院, 2010年
山岸俊男, 『社会的ジレンマ—「環境破壊」から
「いじめ」まで』, PHP 新書, 2008年